

The Road to 2027

仲道郁代

ピアノ・リサイタル

The
Ikuyo
Nakamichi *Road*
to
2027

音楽の哲学

ユニオンツール クラシック プログラム

2026年6月14日 サントリーホール



音楽の哲学

後悔 絶望 祈り

全てが意味付けられ 昇華されていく様を
ベートーヴェン最後の3つのソナタに聴く

生涯の刹那が

凝縮された表現で意味をもたらしてゆく様を
シエーンベルクの6つの小品に聴く

振り返り定義付けられることが

生きてきた意味か

刹那が重なってゆくのが
生きていくということか

まさに音楽は哲学だ

私は私の人生の意味を これら作品から
探し 聴き 表現したいと願う

仲道郁代

P R O G R A M


ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第30番 Op. 109

Beethoven: Piano Sonata No. 30 in E Major, Op. 109

- | | |
|------|---|
| 第1楽章 | Vivace ma non troppo–Adagio espressivo |
| 第2楽章 | Prestissimo |
| 第3楽章 | Gesangvoll, mit innigster Empfindung. Andante molto cantabile ed espressivo |

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第31番 Op. 110

Beethoven: Piano Sonata No. 31 in A-flat Major, Op. 110

- | | |
|------|--|
| 第1楽章 | Moderato cantabile molto espressivo |
| 第2楽章 | Allegro molto |
| 第3楽章 | Adagio ma non troppo–Fuga. Allegro ma non troppo |
-
- 

シェーンベルク
6つの小さなピアノ曲 Op. 19

Schoenberg: Six Little Piano Pieces, Op. 19

第1曲	Leicht, zart	第4曲	Rasch, aber leicht
第2曲	Langsam	第5曲	Etwas rasch
第3曲	Sehr langsame Viertel	第6曲	Sehr langsam

ベートーヴェン
ピアノ・ソナタ第32番 Op. 111

Beethoven: Piano Sonata No. 32 in C Minor, Op. 111

第1楽章	Maestoso–Allegro con brio ed appassionato
第2楽章	Arietta. Adagio molto semplice e cantabile

音楽の哲学

仲道郁代 プログラムを語る



The Road to 2027、2026年春のプログラムは「音楽の哲学」と題し、ベートーヴェン最後の3つのソナタ第30番、第31番、第32番、そしてシェーンベルクの《6つの小さなピアノ曲》Op. 19を演奏します。

ベートーヴェン最後の3曲のソナタを取り上げるコンサートは私もこれまで何度か行ってきましたが、今回はシェーンベルクを間に置いています。ベートーヴェンのソナタ第30番、第31番を聴き、シェーンベルクを聴いたのちに最後の第32番のソナタを味わうと、第32番の聴き方が変わると思うのです。このソナタがよりリアルに心に突き刺さり、そして先に聴いた第30番、第31番の余韻がより深く心に浸透するようになります。

ベートーヴェンとシェーンベルク、全く異なるあり方でありながら、これらの作品にはいずれも人間の真理と言える感覚が聴こえてきます。シェーンベルクに聴こえる不条理、無常さ、そのアフォリズムの世界を体験することで、これまでとは違った聴こえ方がしてくると思います。ベートーヴェンの最後のソナタとして、時には崇高な世界と崇められてきたこれら3曲が、実はもっと、ベートーヴェンが生々しく生きる姿、人間的に泥臭く人生を問い続けるINGな姿、そのプロセスを見せてくれるものであると、より強く感じられると思うのです。

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第30番 Op. 109

作曲：1820年 献呈：マクシミリアーネ・ブレンターノ

ベートーヴェンは、第29番 Op. 106のピアノ・ソナタにおいて、構成としても概念としても巨大さの極みといえる作品《ハンマークラヴィーア》を書き上げました。その後のソナタ第30番、第31番、第32番は、彼の内的な自分史であると

言えるでしょう。

第30番は、愛について語っている曲であると私は思います。ベートーヴェンの「不滅の恋人」と言われる人物、アントーニエ・ブレンターノの娘で、ベートーヴェンが「マクセ」という愛称で可愛がっていたマクシミリアーネへ献呈されたのが、この第30番です。深い意味がありそうです。



マクシミリアーネ・ブレンターノ

第1楽章は、3度と4度の音程からなる、憧れとも言えるような浮遊感をもつ冒頭の主題【譜例1】と、アルペジオから始まる苦悩が凝縮されたような主題【譜例2】、この2つの主題が交互に現れます。連作歌曲《遙かなる恋人に》との関連も感じられます【譜例3】。

【譜例1】 第30番 第1楽章 冒頭 第1主題

Vivace, ma non troppo.

【譜例2】 第30番 第1楽章 第2主題

Adagio espressivo

苦悩のアルペジオ

【譜例3】《遙かなる恋人に》第6曲より

3度 4度
Nimm sie hin' denn, die - se Lie - der, die ich dir, Ge - lieb - te, sang,
愛する君よ、この歌を受け取って

《遙かなる恋人に》

1816年に作曲された、詩人アロイス・ヤイテレスの詩による全6曲の連作歌曲。丘の上に座り遠く離れた恋人を想う男が、雲や鳥、小川に想いを託して届けようとし、最後にこれらの歌を夕べに歌ってほしいと願う内容。献呈はロブコヴィッツ侯爵で、侯爵の夫人（1816年1月に死去）への追悼として書かれた可能性も近年指摘されている。

第2楽章は、第1楽章の最後の和音からペダルマークでつながって始まります【譜例4】。楽章間をペダルによって響きをつなげることは大変に珍しいことです。第1楽章で語られた想いと苦悩から、第2楽章の葛藤を感じさせる楽想が生まれていると考えられます。

冒頭の左手の下行音形には、第31番の「嘆きの歌」との関連も感じられます。

【譜例4】第30番 第1楽章 最後～第2楽章 冒頭

sf *p* *p*
Pedalを踏む
Prestissimo
ff
ben marcato
Pedalを離す

そして第3楽章です。第3楽章の冒頭には「歌うように、最も深い感情をもって」と指示があります【譜例5】。

【譜例5】第30番 第3楽章 テーマ 冒頭

歌うように、最も深い感情をもって
Gesangvoll, mit innigster Empfindung
Andante molto cantabile ed espressivo
3度 4度
mezza voce 半分の声で

第1楽章の2つの主題は、第3楽章のこのテーマの中で融合して1つのフレーズとなります。悩みの吐露であった第1楽章の苦悩のアルペジオは、ここではすべてを受け入れたような感動の中に現れます【譜例6】。

【譜例6】第30番 第3楽章 テーマより

苦悩のアルペジオ
sf *mezza voce*

第1楽章で示された想いの結末が、ここで語られているのだと思います。

このテーマの中には、《遙かなる恋人に》からの引用もあります【譜例7、8】。「そして愛する心は届く」と歌われる部分が引用されているのです。

【譜例7】第30番 第3楽章 テーマより

【譜例8】《遙かなる恋人に》第6曲より

und ein lie - bend Herz er - rei - chet,
そして愛する心は届く

第3楽章は変奏曲形式です。変奏曲とは、テーマが変遷していくものです。上記のテーマがさまざまに変容しながら物語が語られていきます。

第1変奏では、オクターブの動きに《遙かなる恋人に》と共通するのを感じます【譜例9、10】。

【譜例9】第30番 第3楽章 第1変奏

Var. I
Molto espressivo



【譜例10】《遙かなる恋人に》第1曲より



第2変奏は分割された動きです【譜例11】。その音形は第1楽章からのものです。

【譜例11】第30番 第3楽章 第2変奏

Var. II 第1楽章冒頭【譜例1】の音形と類似
Leggiermente

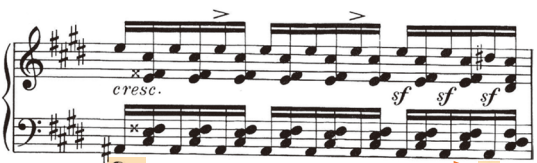


そして二重変奏が現れます。二重変奏は、第32番にも出てきます。

第3変奏には立ち向かうような力があります。

第4変奏のペダルの使い方には、天の声を感じます【譜例12】。

【譜例12】第30番 第3楽章 第4変奏



天の声を聴くということは、最後の3つのソナタを貫くものだと思います。

第5変奏はフーガです。フーガは、積み上げていくということです。3度・4度の音程が積み重ねられていきます。

第6変奏には鐘の音が聴こえます。鐘の音は、第31番、第32番にも現れます。

こうして、変奏曲の物語を経てきた最後に、再び第3楽章の冒頭のテーマが現れます【譜例13】。

【譜例13】第30番 第3楽章 終わり



ここで見逃してはならないことがあります。冒頭で「半分の声で」演奏するようにと書かれていたテーマ【譜例5】が、今度は「歌うように」と指示されているのです。想いは確かなものであると、しっかりしみじみと語りたいたいことなのだと思います。

そして曲の最後の和音には、なんとペダルマークが記されています【譜例14】。

【譜例14】第30番 第3楽章 最後



ペダルを踏んだままで終わる和音——ペダルを離す指示は書かれていません。永遠の響きなのです。その響きの中に、ベートーヴェンが“その愛”についてたどり着いた境地が聴こえてくるように思います。

人生を、愛を振り返り、それが自分にとってどのようなものなのか、そしてどう気持ちの落とし前をつけるのかを語っている——それが「不滅の恋人」と目されるアントーニエの娘への献呈であるということも、興味を惹きます。

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第31番 Op. 110

作曲:1821年 献呈:記載なし

第31番 Op. 110は、ベートーヴェンのピアノ・ソナタの中でも特に他曲のメロディの引用が多い曲です。彼のピアノ・ソナタたちが基本的にモチーフの展開で成り立っていることを考えると、そこにあえて“歌謡的”なメロディを挿入しているのはなぜなのか、興味を覚えます。

引用されていると考えられるものを整理してみます。第1楽章ではグルックのオペラ《オルフェオとエウリディーチェ》の〈われエウリディーチェを失えり〉の引用、第2楽章ではオーストリア民謡《可愛い子猫》と《俺は馬鹿だ、お前も馬鹿だ、皆馬鹿だ》と歌われる俗謡の引用、第3楽章の「嘆きの歌」ではバッハの《ヨハネ受難曲》のイエスの死の場面〈こと成れり〉との類似が見て取れます。1つのソナタにこのようにたくさんの引用メロディが使われるのは大変珍しいことです。

第1楽章の冒頭は、「愛情をもって、穏やかに」
「歌うように、非常に表情豊かに」と指示されています【譜例15】。

【譜例15】 第31番 第1楽章 冒頭

歌うように、非常に表情豊かに

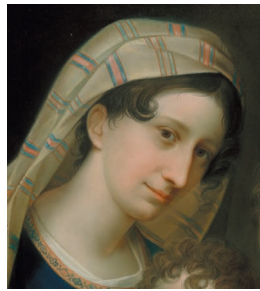
Moderato cantabile molto espressivo

3度 4度

p con *anabilità*
(*sanft*)

愛情をもって、穏やかに

「愛情をもって」という指示は、全32曲のソナタの中でここにしか出てきません。愛と優しい心に満ちるための指示を連ねて始まるこの曲。献呈者は書かれていませんが、ベートーヴェンの「不滅の恋人」であったと言われているアントーニエ・ブレンターノへの献呈が予定されていました。なぜ献呈を消したのかは謎ですが、実はこの年に、もう一人の恋人であったとされるヨゼフィーネ・ダイムが亡くなっています。ベートーヴェンの恋、愛に対する想像が膨らみます。



アントーニエ・ブレンターノ



ヨゼフィーネ・ダイム

そしてこのメロディ、第30番第3楽章のテーマ【譜例5】との類似を感じるのは私だけでしょうか。第30番の最後の和音【譜例14】を展開すると、ソ#シミです。そこから第31番冒頭のラ♭ドミ♭へ。ペダル使いの前曲のラストから、この曲の冒頭へ、想いはつながっているのではないかと。そんな想像さえ膨らみます。

さて、「愛情をもって」という象徴的な指示とともに始まる第1楽章も、前ソナタと同様に3度と4度の音程が重要な意味をもちます。この音程関係は、オルフェオが〈われエウリディーチェを失えり〉と妻を失って歌う歌【譜例16】、そして前述の《遙かなる恋人に》の第6曲「愛する君よ、この歌を受け取って」という歌詞で始まる冒頭のメロディ【譜例3】にも見出される音程です。

【譜例16】 第31番 第1楽章 第1主題

3度 4度

この第1主題と、続く第2主題が提示された後の推移部分【譜例17】は、弾いていると、とても語る力が強いと感じていました。実はこの部分も《遙かなる恋人に》とつながります。第1曲、遠く離れた恋人を想って歌われる歌の冒頭のメロディと同じなのです【譜例18】。

【譜例17】第31番 第1楽章より



【譜例18】《遙かなる恋人に》第1曲 冒頭



こうして奏でられていくこの楽章の最後には、「ドイツの6の和音」と呼ばれる、強い緊張と痛みを伴う和音が登場します【譜例19】。

【譜例19】第31番 第1楽章 最後



ドイツの6の和音

心に楔が打ち込まれるようなこの響きに、胸の痛みが集約されているようです。

第2楽章は、《可愛い子猫》【譜例20】や《俺は馬鹿だ、お前も馬鹿だ、皆馬鹿だ》【譜例21】の引用に、コミカルな間奏が続きます。

【譜例20】第31番 第2楽章 冒頭

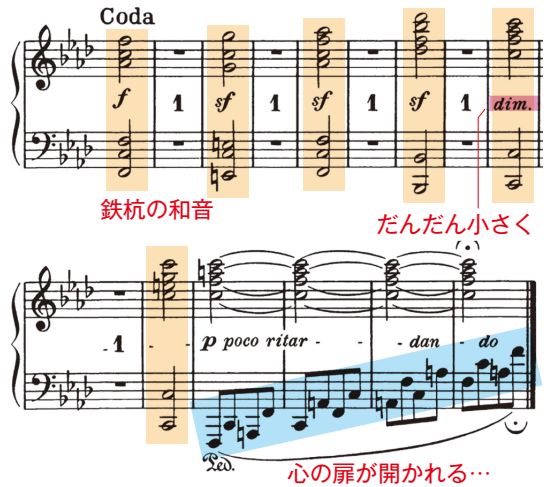


【譜例21】第31番 第2楽章より



コーダの部分では、スフォルツァンドの和音が連続で奏でられます【譜例22】。後悔を叩きつける鉄杭のような和音の連続は、最後はデミヌエンドしていき、分散和音となります。まるで愚かな自分の心の深い闇の中へと降りていくように。そして心の扉が開かれてしまうのです。

【譜例22】第31番 第2楽章 コーダ



第3楽章。心の扉が開くとそこには、深い哀しみがあります。

愛する人と一緒になることを許されなかった哀しみ、一緒にならないと決心しなければならなかった苦しみなのかもしれません。オペラのアリアへの導入のようなレチタティーヴォが語られると、ベートーヴェン自身が「嘆きの歌」と記した歌に入ります【譜例23】。

【譜例23】第31番 第3楽章「嘆きの歌」



キリストの死の場面を歌うバッハの旋律を引用した歌です。死ということ、それは失うことを暗喩しているのだと思います。この「嘆きの歌」のフレーズは、第30番の第2楽章左手の下行のメロディともつながっているかもしれません【譜例4】。

「嘆きの歌」が歌われたのちには、上行形のフーガが現れます【譜例24】。第1楽章冒頭にて“愛に満ちて”奏でられた3度・4度音程のテーマが、ここで上行形のフーガとして奏でられます。

【譜例24】 第31番 第3楽章 フーガ

Fuga
Allegro ma non troppo

私は、上行形のフーガとは人間が創り上げる建造物のような様であると捉えています。ここでは愛に満ちた想いを肯定していくというプロセスに入っているのだと思います。

しかしながら、再び、「嘆きの歌」が現れてしまうのです【譜例25】。今度は「疲れ果てて嘆きながら」という指示とともに。涙にむせぶ、慟哭の「嘆きの歌」です。

【譜例25】 第31番 第3楽章 2度目の「嘆きの歌」

Ermattet, klagend **疲れ果てて嘆きながら**
Perdendo le forze, dolente

なんという哀しみでしょうか。

そのような心からの哀しみの表現を経て、けれどもベートーヴェンは、そこで終わらないのです。苦しみを美しさの賛美へと、永遠の清らかなものへと昇華していく。苦しさや哀しみを経て、神と人間が相見えるかのような世界へと向かっていきます。

2度目の「嘆きの歌」の後には、教会の鐘、もしくは天の鐘のような和音が高らかに鳴り響きます。すると、天の扉が開かれます【譜例26】。

【譜例26】 第31番 第3楽章より

そこへ今度は、神の声、天の声と言えるような反行フーガが上から降ってきます【譜例27】。

【譜例27】 第31番 第3楽章 フーガの反行形

Nach und nach wieder auflebend
sempre una corda

その神の声に対して「それで良いですね？」「良いのですよね？」と何度も確認しているかのような応答を繰り返しながら、天から降りてくるフーガの主題と、人間、すなわちベートーヴェン自身のフーガの主題【譜例24】が重なり合っ

て響き合い、ついには人間の歓喜へと連なっていく

【譜例28】 第31番 第3楽章 最後

この曲は、個人的な愛について語るところから始まっているのかもしれませんが。けれども、それはベートーヴェン個人の愛と苦悩を経て、理想の愛とは何か、という普遍的な定義へと変容していると私は思います。普遍的なものへと昇華していく様を聴くことができるのだと思います。

シェーンベルク 6つの小さなピアノ曲 Op. 19

作曲:1911年 献呈:なし

シェーンベルク (1874～1951) は、ロマン派から新ウィーン楽派へと移行していく時代を生きた作曲家です。《6つの小さなピアノ曲》Op. 19は、いずれも9小節～十数小節というとても短い作品です。12音技法に至る過程で試みた調性からの離脱——調性による緊張と弛緩を離れ、1つ1つの音を純粋にそれ自体として存在させ、音から音への関係性そのものに語らせる、そのようなあり方の中で、興味深いのは、ベートーヴェン最後の3つのソナタで意味をもって用いられた3度と4度の音程がシェーンベルクでも重要になっていることです【譜例29、30】。

【譜例29】第1曲 冒頭

Leicht, zart(♩)

3度 4度

ppp

【譜例30】第2曲 冒頭

Langsam(♩)

äußerst kurz pp

3度

これらの音程を使いながら、音使いとしては大変にミニマルで、かつ濃縮された豊かな表現をし、6つの小さな作品それぞれが異なる宇宙を描いています。

第1曲より。強弱記号が非常に細かく記されている。

例えば第1曲は引き延ばされたものに対して散らばるものたちであったり、第2曲は律動と空白であったり。第3曲は引き伸ばされた4度が印象的で、第4曲・第5曲にはユーモアも感じられます。

そのような凝縮された世界観を作るために、強弱記号やアーティキュレーションの記号が非常に細かく書かれており、それがこのミニマルな世界でのドラマティックさを作っていると思います。

そして第6曲です。マラーの死を体験して書かれた第6曲でも4度音程が象徴的に重ねられていきます【譜例31】。

【譜例31】第6曲 冒頭

Sehr langsam(♩)

4度 4度

pp

4度を重ねていくということは、その先に和声の解決は訪れないということです。永遠に解決しない——では永遠の世界とは何なのかというと、生きている人は経験できない、死の世界と考えることができるのかもしれませんが。

この6つの小品はいずれも、在るがままのあ

り方を断片的に切り取り、人間の意思では変えることができないような普遍的な感覚を湛えています。そしてそれは解決しないがゆえに、不条理さを感じさせるものだとも思います。

このようなシェーンベルクの世界の後にお聴きいただくベートーヴェンの最後のソナタ、第32番。ベートーヴェンには苦悩があったと言われる。耳が聴こえなくなっていること、平民に生まれたこと、弟や甥との不和、叶わなかった愛——さまざまなことが考えられます。ベートーヴェンを語る時に、「運命」という言葉でなんとなく納得してしまうような気もしますが、その苦悩をもたらすものの「質」とは、一体どのようなものだったのか。シェーンベルクの作品に聴こえる無常感、不条理という感覚は、その“運命”がどのような質のものなのかを、感覚的に示してくれるように思います。

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第32番 Op. 111

作曲:1821年末~1822年初頭 献呈:ルドルフ大公

第32番は、生きることそのものについて問うている曲です。第30番、第31番という内的な自分史を経て、限りある肉体をもつ人間としての自分と、限りのない世界にある偉大なもの——神なのか、絶対的な何かなのか——への問いがこの最後のソナタに結実しています。

第1楽章は冒頭から減7度という強烈な音程関係が、32分音符とダブル付点の8分音符という鋭いリズムをもって奏されます【譜例32】。

【譜例32】 第32番 第1楽章 冒頭

ここまで激しい冒頭は全32曲のピアノ・ソナタにおいて初めてであることも驚くべきことです。そして序奏の部分は3つのパートからできており、それは若き日の《悲愴ソナタ》のハ短調の序奏と構造が同じなものも印象的です。

その序奏で地底から聴こえてくるうめき、地鳴りのようなトリルに続いてフォルティッシモで第1主題が現れます【譜例33】。

【譜例33】 第32番 第1楽章 第1主題

人生への、運命への大いなる「問い」が明確に提示されます。

この第1楽章の中で、大変印象的に登場するのが、変イ長調の第2主題です【譜例34】。

【譜例34】 第32番 第1楽章 第2主題

シューバルトの調性格論では葬送・死・永遠性などが含まれる調とされ、作曲家のシューバルトは「自らの内なる幸福な調性」と呼び、そして第31番では愛する人を失うというグルックのオペラの引用でも用いられた、変イ長調。最後のソナタにおける一瞬の変イ長調のちらつきに、深い意味を感じずにはられません。この第2主題では葬送を表すとされる「ターンタ」というリズムも使われています。

第1楽章では大いなる謎を提示し、その謎が向けられた対象——運命なのか、絶対的なものなのか——に翻弄される様や、抗う様を聴くことができますと思います。最後は、鉄杭が打たれるかのような衝撃的な和音【譜例35】により、絶望、怒りをも孕む問いが呈され、怪しく沈んでいきます。鉄杭の和音は、第31番にもありましたね【譜例22】。

【譜例35】 第32番 第1楽章より

鉄杭の和音

そこに聴こえるのは諦めなのかうめきなのか……。

そして、ベートーヴェンの全ピアノ・ソナタの最後の楽章、第2楽章が始まります。

この最後の楽章について考えるとき、なぜ「Arietta (小さな歌)」と題したのかということに疑問を感じます。運命的なるものに抗うさまざまなエネルギーを秘めた第1楽章の帰結が、「小さな歌」とは……。これは一体、どのようなことを語ろうとしているのでしょうか。

第2楽章はハ長調の世界です。冒頭は「ド・ソ・ソ」という4度下行の音程で始まる変奏テーマのメロディが穏やかに歌われます【譜例36】。

【譜例36】 第32番 第2楽章 変奏テーマ 冒頭

Arietta 小さな歌
Adagio molto semplice e cantabile

ハ長調

このメロディは実は、第1楽章で地底のうめきの中から現れたモチーフ【譜例33】が変容したものです。第1楽章の衝撃は、裏返し、訥々と、哀しみすら湛えて歌われていきます。

変奏テーマの後半はイ短調です【譜例37】。

【譜例37】 第32番 第2楽章 変奏テーマより

第1主題のドミ♭シがドシミに変化

イ短調

これは第30番の第1楽章に2つの想念があったこととも通じていると思います。

「ド・ソ・ソ」の変奏テーマは、楽章内で変奏され、音価やリズムの変容により、さまざまに表現を変えながら紡がれていきます。変奏とは、同じ主題を、姿を変えて何度も聴くことです。何度も聴いていくことは、確認をする、思い起こす、同じ感覚に対して異なる情景を見ることでもあります。

そうして同じテーマを歌いながら行き着いた4つ目の変奏では、人間的な声と天の声の2つが交互に現れる二重の変奏となります【譜例38】。

【譜例38】 第32番 第2楽章 第4変奏

1つ目の変奏 (低音=人間)

pp

2つ目の変奏 (高音=天)

pp sempre pp

二重変奏は第30番のソナタの第3楽章にも見られましたが、ここでは低音域での人間と、高音域での天上界との対話が聴こえます。

その後、ベートーヴェン最後のソナタ、最後の楽章におけるいちばんの大いなるドラマが始まります。ハ長調で低音域から高音域へとかけ上り、次にイ短調で上り詰めていきます【譜例39】。

【譜例39】 第32番 第2楽章より

変奏テーマがハ長調とイ短調で出てきていたことも思い出されます。

こうして天上界と人間界がつながった瞬間、右手高音域の天上界にのぼりゆくトリルに対し、左手低音域で力強い「ド・ソ・ソ」が現れるのです【譜例40】。

【譜例40】 第32番 第2楽章より

冒頭で穏やかに歌われた「ド・ソ・ソ」という4度音程が、ここで再び現れ、大いなる問いは、しかしながらすでにその答えを確信した問いとして提示されます。

同時に、その右手のトリルはどんどん音域が上がりゆき、左手の音域はとてつもないテンションを抱きながら下がりゆき、双方かけ離れて、「問いの頂点」を極めるのです【譜例41】。

【譜例41】 第32番 第2楽章より

極めて緊張感の高いドラマチックな瞬間です。その瞬間、ベートーヴェンは、何かの啓示を受ける。何か“わかる”のだと思います。その後は、「そうなのか、そうなのだ」と繰り返し自身に言い聞かせて歩みゆく。歩み続け、天の境地が開けてそこに昇らんとゆくのです。トリルたちが、天の世界へと誘うようです。

エトヴィン・フィッシャーはこの曲について「この2つの楽章に、此岸と彼岸が象徴されている」、つまり第2楽章は彼岸の世界だと述べました。

私はこの部分を弾いていると、ダンテの『神曲』を思い出します。ダンテにとって天国篇は、神の啓示と恩寵、そして愛を体現するベアトリーチェに導かれる、魂の上昇の旅です。地獄・煉獄を経て天国へと向かうその様は、第32番の第1楽章から第2楽章への流れと重なるように思います。そしてベアトリーチェという存在——血肉をもったフィレンツェの娘と神の愛を体現する者が一つの存在の中に共存しているということは、ベートーヴェンが個人の愛から出発しながら、愛という概念そのものへと問いを深めていくあり方とも通じているように感じます。

天国篇で、ダンテは船に乗り、誰も歌ったことのない天国の歌を歌って行きます。その歌を聴きたいと願う人たちが、小さな舟に乗って彼を追っていきましょう。ダンテはその小舟に乗る人たちに「永遠の真理を渴望し続けているのではないならば、岸へ引き返しなさい」と言います。

ベートーヴェンは永遠の真理を渴望し続けていました。しかし、彼は第32番の最後の最後に、それでも地上に降りてくるのです【譜例42】。

【譜例42】 第32番 第2楽章 最後

そして左手「ド・ソ」の4度下行。「ド・ソ」はここで強い確信に変わり、最後はその逆行形の上行する4度2音「ソ・ド」で、曲を終わります。第1楽章の強い抗い、問いは、ピアノッシモの弱音の中で肯定されるのです。その最後の和音は8分音符で書かれ、16分休符がつきます。肯定して、納得して、そして歩み続けるということなのだと思はれます。

さて、最初の疑問についてです。なぜ「Arietta (小さな歌)」なのか。両楽章のドラマを辿り終えて思うのは、ベートーヴェンは、運命や絶対的なものに対して、一人一人の人生とは小さなものであり、密やかな想いであると考えたのではないか、ということです。どんな運命に対しても、人は一人で、自分という小舟に乗って自分の歌を探さなければならないということ。結果、自己と絶対的なものとの隔たりの大きさを強く認識し、畏敬の念に満ちるのだと思うのです。

そこに見出すのは“受容”です。自己を、世界を受け入れることは決してやさしいものではありません。けれども問い続けるのです。生きて、愛して、その先に見出したい世界がある。そこに向かうプライベートな生々しいプロセスが、こ

の曲には描かれている。けれどもそうやって小さな一人一人がたどり着く輝かしい場所があるのだと大勢に語りかけるのがベートーヴェンなのではないでしょうか。

この3曲、第30番、第31番、第32番は、「ブレンターノ・ソナタ」と呼ばれることもあります。第30番、第31番が愛について語られていることは見てきた通りですが、第32番もまた、愛についてのソナタなのです。聖人ベートーヴェンへの道程ではなく、そこには愛があり、それが天上の世界なのだと思ふに至り、彼はだから、歩みゆく。それがこの最後のソナタであると、私は思います。

ベートーヴェンが、彼の人生をどのように受け止め、どのように昇華させ、どのように進んでいこうとしているのか。極めて人間的に生々しくもがき、苦しみながら、彼が見出そうとする境地がそこにある。超人的な意思の力と、激しくも豊かな感情とが深い教養をもって音となっている。そのINGの姿はシェーンベルクとの対比によって、より鮮明に浮かび上がります。それが今回の「音楽の哲学」です。人生の刹那、積み重ねてきた人生、そして、何を生きるのかどう生きるのかというこれからの生き様、そのすべてを携えて、音に耳を傾けて聴いていただければ幸いです。

「不滅の恋人」

ベートーヴェンの遺品から見つかった未投函の手紙の宛名。1812年7月6～7日、保養地テプリッツで鉛筆によって書き綴られた10枚の紙には、愛についての問いが刻まれている。

「わたしたちの愛は、犠牲によってしか成り立たないのだろうか」「なぜ、愛するものと離れなければならないのか」「君の愛がわたしを最も幸福にし、同時に最も不幸にする」「宇宙の中での自分を考えるとき、わたしとは何者か——しかしそこにこそ、人間の神性がある」「わたしたちの愛は、天の建造物ではないだろうか」——。

写真はベートーヴェンの旅行用書き物机。「不滅の恋人」への手紙はこの机の引き出しに保管されていたと考えられている。ベートーヴェンの臨終の際にもベットのそばに置かれ、死の3日前、この机で最後の遺言状が書かれた。



Beethoven-Haus Bonn, HC Bodmer Collection

仲道郁代のベートーヴェンの礎

——諸井誠との対話から育まれた確信

柴辻純子

2018年にスタートした「The Road to 2027 リサイタル・シリーズ」も9年目。いよいよ佳境に入ってきました。音楽を哲学的に探究する「春のシリーズ」は、毎回ベートーヴェンのピアノ・ソナタがプログラムに入っていて、今回は、最後の三大ソナタがシェーンベルクの小品とともに取り上げられます。仲道さんはこれまで8回、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏を行ってきました。8回と簡単に口にしてしまいますが、ベートーヴェンが生涯にわたって書き続けたピアノ・ソナタ全32曲を演奏するのは並大抵のことではなく、技術・精神・体力、すべてにおいてタフさが求められます。なぜそのようなことができるのか、その原点のひとつは、2002年から2006年にかけて彩の国さいたま芸術劇場で劇場初代芸術監督・作曲家の諸井誠（1930～2013）氏とともに行った『ベートーヴェン全32曲のピアノ・ソナタを語り、聴く会』（全12回）にあると言えるでしょう。ベートーヴェンのピアノ・ソナタについて語り尽くし、仲道さんの演奏を聴く、レクチャー付きコンサートとしても重量級の、他に類を見ない、劇場の人気企画でした。1997年にオープンしたさいたま芸術劇場は、音楽、演劇、舞踊の全ジャンルにわたって、諸井芸術監督が企画を練られていました。筆者は当時、多忙な芸術監督をサポートするかたちで音楽公演全般に関わり、仲道さんのシリーズも事前の準備や打ち合わせ等に参加し、そのやりとりを身近に聞いてきました。そこでは何が行われていたのか。仲道さんのベートーヴェン演奏の原点を探るべく、その内容を振り返ってみたいと思います。

「素晴らしいピアニストを見つけたよ！でも彼女は人気ピアニストだし、スケジュールが押さえられるか心配だよ」。諸井先生の言葉がいまでも耳に残っています。作曲家であり、新聞・雑誌等で音楽評論も手がけられた先生は、なかでも

LectureConcert 彩の国ベートーヴェン・シリーズ(SBS)

諸井誠&仲道郁代レクチャー・コンサート

ベートーヴェンの全32曲のピアノ・ソナタを語り、聴く会(全12回)

第1回
6.30(日) 15:00開演(11:30開演)
第2回
12.15(日) 15:00開演(11:30開演)
第3回
2003.3.29(土) 15:00開演(11:30開演)

料金
全席 5,800円 A席 3,800円
1回チケット 5,800円 A席 3,800円

チケット発売日
3月3日(日)
3月9日(土)

彩の国さいたま芸術劇場
音楽ホール

諸井誠 芸術監督
柴辻純子 演出

Makoto Moroi
&
Ikuyo Nakamichi

彩の国ベートーヴェン・シリーズ 諸井誠&仲道郁代レクチャー・コンサート「ベートーヴェンの全32曲のピアノ・ソナタを語り、聴く会(全12回)」チラシ(第1～3回) 2002年 彩の国さいたま芸術劇場

音楽家ベートーヴェンに特別な思い入れをもっていました。仲道さんとのレクチャー・コンサートでは全32曲のソナタをベートーヴェンの「人生ソナタ」と位置づけ、ソナタ形式の枠組みのなかで捉え、楽曲分析においては細部にわたり緻密に、構造、形式、調性、動機、リズムなど様々な観点からアプローチし、同時に作曲家という立場からベートーヴェンの内面に迫っていきました。

ちょっとした言葉やきっかけから、知識量豊富な諸井先生の想像は広がります。あるとき、創

作中期の第17番《テンペスト》の第1楽章冒頭のアルペジオ部分について、「遠くから聞こえてくるエオリアン・ハーブのようだ」（諸井氏）と、風によって倍音が鳴るエオリアン・ハーブを劇場スタッフに製作してもらい、舞台上で（巨大な扇風機を使って）音を鳴らしてみるなど思いついたことは何でも試していました（このエオリアン・ハーブはいまも劇場の倉庫に保管されているとのことです）。

諸井先生は、毎回の公演の準備（楽曲分析、配布冊子の原稿作成等）には相当の時間をかけていました。仲道さんとの事前打ち合わせも1回の公演につき複数回、長時間に及び、新しいアイデアが浮かぶと直電も！かかってきます。一方、仲道さんは、諸井先生の解釈をすべて咀嚼して、舞台上で自分の言葉で語り、自身のアプローチで演奏するというタフさ。ハードなシリーズを完走できたのは、関わる誰もが音楽家ベートーヴェンをより深く知りたいという思いがあったからでしょう。それはお客様も同様で、最後まで見届けようと、毎回3時間近い公演が常に完売。舞台と客席も一体感がありました。

ベートーヴェンの最後の3曲のソナタは、2回に分けて第9回と第10回に取り上げられました。これも諸井流で、後期の7曲のソナタは、「ソナタ形式的作曲家人生」という視点から「ソナタ形式とのアナロジー」を試み、第30番（ホ長調）は第1再現部とされ、序奏部とする第27番（ホ短調）、提示部とする第28番（イ長調）とともに#系の3曲としてまとめ、第31番（変イ長調）と第32番（ハ短調）はb系として2曲の間に第26番「告別」（変ホ長調）をはさむかたちで演奏されました。

さて、今回の「音楽の哲学」のプログラムで目を惹くのは、シェーンベルクの《6つの小さなピアノ曲》Op. 19が含まれていることです。仲道さんがシェーンベルクの作品を、そもそも新ウィーン楽派の作曲家をコンサートで取り上げるのはまったく初めてとのこと。20世紀音楽の扉をひらいた作曲家のひとりアルノルト・シェーンベルク（1874～1951）は、後期ロマン派の作風から出発して、やがて無調、12音技法の創始へと歩みを進めました。シェーンベルクの創作においてピアノ曲が占める割合はそれほど大きくはありませんが、創作の節目において、作曲家が



アルノルト・シェーンベルク、ウィーンの書斎にて。
壁面にはマーラーの肖像写真が飾られている。
撮影：アルバン・ベルク 1911年 Arnold Schönberg Center, Wien

新たな局面に足を踏み入れたとき、それが正しいのか確認するかのようには、ピアノを選んでるのは興味深いことです。

《6つの小さなピアノ曲》（1911）は、調性や主題性を放棄したシェーンベルクがたどり着いたひとつの境地です。1908年に無調の世界へと入っていき、主題性を避けるとミニアチュール（極小形式）にならざるを得なくなります。第1曲（17小節）、第2曲（9小節）、第3曲（9小節）、第4曲（13小節）、第5曲（15小節）、第6曲（9小節）と、切り詰められた世界に選び抜かれた音が配置されました。5曲目まではモチーフ的なものや反復も認められるも、構成は対比や音の跳躍など音の運動性に委ねられます。第6曲は、尊敬するマーラーの死（1911. 5. 18没）を受けて急遽作曲されました。自筆譜は黒インクでためらいなく書かれ、修正の痕がありません。「きわめて遅く」と指示され、4度和音と7度音程が吊いの鐘のように響きます。

仲道さんは、「シェーンベルクのピアノ曲を聴いてからだ」と第32番はまったく違って聴こえる」と話しますが、それを聞いて諸井先生の発言を思



第6曲の自筆譜〔清書稿〕1911年 Arnold Schönberg Center, Wien

い出しました。第30番第2楽章「プレスティッシモ」について、思い切った挿入楽章でショッキングな存在としつつ、「ベートーヴェンを弾くのに、後期ロマン派以降の音楽の変遷を知っておくことは必要条件のひとつ」とベートーヴェンの新しさを知るにはその先を理解してこそ、と語っていました。仲道さんが「行きついた果て」とするシェーンベルクの音楽と対比させることで、ベートーヴェンの新しさがよりリアルに鮮明になるのだと思います。

最後の第32番は、第2楽章（ハ長調）終結部の美しいトリルが主和音に解決して結ばれます。諸井先生によれば、ハ長調の主和音（ドミソ）は、第1番（ヘ短調）の属和音でもあり、ハ長調の主和音に解決すると考えれば最初に戻り、32曲のソナタは円環としてつながります。そうすると、仲道さんが「生々しく生きるベートーヴェンの姿」とするトリルは新しい生命の誕生のようにも感じられるのではないのでしょうか。

こうして振り返ってみると、仲道さんがピアニストとして気づき感じていたことが諸井先生の分析が裏づけとなって確信へと変わっていき、

それがいまの説得力のある演奏につながっていることがわかります。仲道さんの探求心と好奇心も先生からの影響を感じずにはられません。「ベートーヴェンの全32曲を聴き、語り、論じる機会は、生き続ける限り、私の生活の中から失われる時は決してない」（諸井氏）。仲道さんもずっと弾き続けていく。思いを同じにしているに違いないありません。

柴辻 純子 [しばつじ・じゅんこ]

桐朋学園大学音楽学部卒業、同大学研究科および慶應義塾大学院修士課程修了（音楽学専攻）。2000～06年埼玉県芸術文化振興財団音楽プロデューサー。大学での講義のほか、文部科学省文化審議会委員等、各種委員を歴任。日本製鉄音楽賞選考委員。1990年代からNHK-FM番組で解説、司会を務め、現在は「ブラボー！オーケストラ」にレギュラー・パーソナリティーとして出演する。

仲道郁代× ベートーヴェンの 歴史

「私の音楽の核にはつねにベートーヴェンがある」と仲道は語る。約30年にわたってベートーヴェンと向き合い続けてきた仲道にとって、ピアノ・ソナタ全32曲は音楽家としての思考と感性が育まれる土壌であり、生涯をかけて問い直す対象である。

ピアノ・ソナタ全曲演奏会をはじめ、録音、室内楽、古楽器、著述などあらゆる方向へと広げられてきた探求の蓄積が、現在進行中の「The Road to 2027リサイタル・シリーズ」において豊かに結実している。

ピアノ・ソナタ全曲演奏会——

1997年以降、国内8か所のホールにおいてピアノ・ソナタ全32曲の全曲演奏会を計8回実施。各地での演奏会はそれぞれ異なる特色をもち、仲道のベートーヴェン解釈を多角的に深めてきた。なかでも2002年から2006年にかけて彩の国さいたま芸術劇場で行われた諸井誠氏とのレクチャー・コンサートは、作曲家の立場からの緻密な楽曲分析と仲道自身の演奏とが相乗し、仲道のベートーヴェン演奏を広く印象づけるものとなった。現在は、横浜みなとみらいホール（2020年～2027年）および京都コンサートホール（2022年～2028年）にて進行中。

●1997年12月～2001年7月
神戸学院大学メモリアルホール
神戸学院大学 Green Festival ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全曲演奏会〔全8回〕

●1998年1月～2001年7月 フィリアホール
土曜ソワレシリーズ 女神との出会い
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全曲演奏会〔全8回〕

●2002年6月～2006年3月
彩の国さいたま芸術劇場音楽ホール
諸井誠&仲道郁代レクチャー・コンサート
「ベートーヴェンの全32曲のピアノ・ソナタを語り、聴く会」〔全12回〕

●2002年7月～2006年10月 クボタホール
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全曲演奏会〔全11回〕

●2008年8月～2016年8月 セブシブ国際村
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全曲公演〔全8回〕

●2011年12月～2017年7月 しらかわホール
仲道郁代 ベートーヴェン 鍵盤の宇宙〔全12回〕

●2020年7月～2027年4月（進行中）
横浜みなとみらいホール
仲道郁代 ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全曲演奏会〔全8回〕

▶第7回〈田園～のどやかなベートーヴェン、爽り〉
2026年9月6日（日）
13:30開演
問合せ：神奈川芸術協会
045-453-5080



●2022年6月～2028年（進行中）
京都コンサートホール 小ホール
仲道郁代 ベートーヴェン：
ピアノ・ソナタ全曲演奏会〔全7回〕

▶第5回〈最後の境地〉
2026年6月27日（土）
14:00開演
問合せ：otonowa
075-252-8255



ベートーヴェンは仲道の協奏曲レパートリーでも中心に位置し、繰り返し取り上げられている。写真はブダペスト・リスト音楽院でのハンガリー国立フィルとの共演（2022年12月17日）。陰影を伴う独自の《皇帝》像が打ち出され、話題となった。

©MNF photo Attila Nagy

録音——

2003年から2006年にかけて、彩の国さいたま芸術劇場音楽ホールにてピアノ・ソナタ全32曲の録音を完成させた。諸井誠氏とのレクチャー・コンサートと並行して進められたこの録音の最終巻『最後の三大ソナタ 第30番・第31番・第32番』は2007年度レコード・アカデミー賞を受賞

し、「ベートーヴェン演奏家・仲道郁代」の名を確固たるものとした。ピアノ協奏曲全5曲は、パーヴォ・ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマーフィルハーモニー・ブレーメンとの共演で2004年および2006年に録音。2020年7月にはベートーヴェン生誕250年を記念し、ソナタ全集と協奏曲全集をまとめた『仲道郁代ベートーヴェン集成～ピアノ・ソナタ&協奏曲全集』(CD12枚+ハイブリッドディスク3枚+DVD2枚、計17枚組)として、ソニー・ミュージックレーベルズより発売された。



『仲道郁代
ベートーヴェン集成
～ピアノ・ソナタ&協奏
曲全集』

“ピアノ室内楽”全曲演奏会——

ベートーヴェンのピアノを含む室内楽を作品番号順に網羅するシリーズ。2022年よりヤマハホールにて開始し、精鋭の奏者たちとともに創作の軌跡を辿っている。ソナタ全曲演奏とは異なる視点——協働する他者との対話のなかにベートーヴェンを探ること——が、このシリーズに固有の緊張感と発見をもたらしている。Vol.1～5(2022年～2024年)では主に初期の作品を取り上げ、創作意欲と自信に溢れた若きベートーヴェンの姿を鮮やかに描き出して聴衆を魅了した。Vol.6からはいよいよ中期・後期の作品へと進む。

▶ “ピアノ室内楽”全曲演奏会Vol.6
2026年8月28日(金)
19:00開演 ヤマハホール
問合せ：ジャパン・アーツびあ
0570-00-1212



古楽器による探求——

仲道はモダンピアノのピアニストでありながら、自らフォルテピアノを所有して研究を重ねてきた。所有する楽器は、J.A.シュタイン(1790年製レプリカ)、ブロードウッド(ロンドン、1816年製オリジナル、山本宣夫修復)、プレイエル(パリ、1842年製オリジナル)。

ベートーヴェンが実際に手にしていた楽器の構造や音響に照らして楽譜を読み直すことは、モダンピアノでの演奏解釈に深みと独自性をも

たらしている。こうした研究の成果は折に触れて演奏会で披露されてきた。2026年3月に武蔵野市民文化会館にて開始された古楽器でベートーヴェンのソナタを辿るコンサートシリーズの第1回は発売開始後即売となるなど、その注目度の高さがうかがえる。

著述——

月刊誌『ムジカノヴァ』(音楽之友社)にて、2018年11月号より「私的ベートーヴェン演奏論」を隔月連載。ソナタ全32曲を1曲ずつ取り上げ、楽譜から何をどのように捉え、推理し、音にしていくかを仲道自身の言葉で論じた。2025年9月号をもって全32曲を完結。演奏家が自らの解釈を言語化するこの連載は、読者にとってのベートーヴェン入門としてだけでなく、仲道自身にとっても演奏論を深める場となった。

マスタークラス——

仲道郁代のベートーヴェン演奏への深い理解と、次世代への真摯な伝達が凝縮されたマスタークラス。気鋭の若手ピアニストたちを相手に、楽譜の読み方から音の作り方まで、説得力ある言葉と実演で示すその内容は大きな反響をよんだ。仲道郁代オフィシャルYouTubeチャンネルにて公開中。

仲道郁代・ベートーヴェン マスタークラス (前編)
亀井聖矢「ワルトシュタイン」



手前から1816年製ブロードウッド、YAMAHA CFX、1790年製シュタイン(レプリカ)。モダンピアノとフォルテピアノを弾き分けるコンサートもたびたび開催されている。写真は2020年1月10日 東京芸術劇場 ©noriyukisoga



仲道郁代・ベートーヴェン マスタークラス (後編)
吉見友貴 ピアノ・ソナタ第31番



2026年「秋のシリーズ」 組曲～調和と心慮～

曲目

バッハ：パルティータ第1番 BWV825
 ラヴェル：クーブランの墓
 バッハ：イタリア協奏曲 BWV971
 バッハ：パルティータ第2番 BWV826
 グリーグ：組曲「ホルベアの時代より」Op. 40



2026年10月3日(土)

宗次ホール

問合せ：宗次ホールチケットセンター 052-265-1718

2026年10月4日(日)

アクトシティ浜松 中ホール

問合せ：浜松市文化振興財団 053-451-1114

2026年10月17日(土)

長岡リリックホール コンサートホール

問合せ：長岡市芸術文化振興財団 0258-29-7715

2026年10月18日(日)

サントミュージゼ 小ホール

問合せ：上田市交流文化芸術センター 0268-27-2000

2026年10月31日(土)

浜離宮朝日ホール

問合せ：ジャパン・アーツ ぴあ 0570-00-1212

2027年「春のシリーズ」 生と死の揺らぎ

曲目

ショパン：ピアノ・ソナタ第2番「葬送」Op. 35
 ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第29番
 「ハンマークラヴィーア」Op. 106

2027年5月9日(日)

アクトシティ浜松 中ホール

2027年5月15日(土)

宗次ホール

2027年5月23日(日)

兵庫県立芸術文化センター

KOBELCO 大ホール

2027年5月30日(日)

東京芸術劇場 コンサートホール



CFX

Yamaha Concert Grand Piano

私と、響き合う。

旬のピアニスト情報が満載

ピアニストラウンジ

検索

Pianist Lounge.

<https://jp.yamaha.com/sp/pianist-lounge/>

ヤマハ株式会社

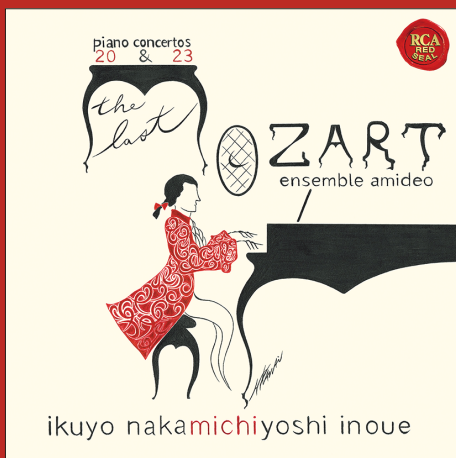
仲道郁代の名盤 @RCA RED SEAL



Sony Music Japan International



仲道郁代と井上道義——
最後の共演となった唯一無二のモーツァルト。



仲道郁代 (ピアノ) 井上道義 (指揮) アンサンブル・アミデオ ザ・ラスト・モーツァルト

モーツァルト:
ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K. 466
ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K. 488

〔演奏〕 仲道郁代 (ピアノ) | ヤマハコンサートグランドピアノ (CFX)、井上道義 (指揮)、アンサンブル・アミデオ [コンサートマスター: 長原幸太]

〔録音〕 2024年12月16&17日 東京、第一生命ホール DSDレコーディング

〔解説〕 仲道郁代、沼野雄司、安田和信

仲道郁代の満を持してのモーツァルト協奏曲録音は、2024年12月をもって指揮活動を引退した名匠・井上道義との共演。モーツァルトは仲道にとって重要なレパートリーであり、協奏曲はデビュー当時から弾き続け、国内オーケストラとの共演のみならず、英国、チェコ、カナダ、ベルギーなど海外においても高い評価を得てきました。今回の録音のために「アンサンブル・アミデオ」と名付けられたオーケストラが編成され、コンサートマスター長原幸太をはじめ、井上が信頼を寄せ、また井上との最後の音楽づくりをぜひ共にしたいというプレイヤーが集結。録音最終日は奏者全員が白い服を着用し、独特な神聖さ、厳かさを帯びたなかでの演奏となりました。

絶賛発売中

¥3,630 (税込) ハイブリッドディスク ● SICC 19086



Hi-Res DSD2.8 & 96kHz/24bit
ハイレス配信

2007年度レコード・アカデミー賞
(器楽曲部門) 受賞



仲道郁代 公演曲収録 ベートーヴェン:最後の三大ソナタ ~第30番、第31番&第32番

ベートーヴェンがピアノ・ソナタという形式で辿りついた最後の境地。晩年の傑作群が生み出された時期に書かれ、内省的で、深遠な宗教性や浄化された人間的高揚感を織り込んだ深遠な傑作ぞろい。「作品111」の第2楽章の最後のハ長調までたどりつく、再びハ短調のソナタ第1番から始めたくなる。(仲道談)

絶賛発売中

¥2,640 (税込) CD ● BVCC 34108



優れた製品は、常に最高のパフォーマンスを奏でる。

ユニオンツールはオフィシャルスポンサーとして、音楽活動を全面的に応援しています。

「優れた製品を供給し社会に貢献する」

ユニオンツールは、このフィロソフィーを昭和35年の創業から守り続けています。

人と技術と地球を結ぶ



ユニオン ツール株式会社

<http://www.uniontool.co.jp>

The Road to 2027

仲道郁代ピアノ・リサイタル「音楽の哲学」

2026年6月14日(日) 開演 14:00 サントリーホール

主催：ジャパン・アーツ

特別協賛：UNION TOOL ユニオン ツール株式会社

協力：ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル/ヤマハ株式会社

発行：有限会社オフィス・ナカミチ

デザイン：三木和彦/株式会社アンパサンドワークス

編集：北川由子/有限会社オフィス・ナカミチ